

〔新刊紹介〕

外村彰氏著

『犀星文学——いのちの呼応——庭といきもの』

八原 瑠 里

室生犀星は自然をこよなく愛した作家である。彼の自然への眼差しは、実生活の庭造りや動植物の飼育によって培われ、自然をモチーフとした作品群を創り出したことでも大切といえよう。

本書は、こうした作品群にある「生命同士の交感」に注目し、「いのちの呼応」という観点から分析することで、犀星文学の魅力を再検討するものである。「いのちの呼応」とは、自然の生命感や犀星の感受性といった「生命同士の交感」を意味し、犀星文学の「心的転回」の「機縁」ともされている。本書では、犀星の描いた自然のうち〈庭〉と〈いきもの〉とに焦点を絞り、第一篇「庭」、第二篇「いきもの」、第三篇「詩歌と風土」と論を進めていく。

第一篇では、〈庭〉に関する詩や小説を取り上げ、犀星の美意識や庭園観について

考察している。まず、氏は、犀星が、アミニズム的な感覚を養い、自然との交感を促された空間として庭を位置づける。そして、土と垣根を主眼とする庭園観が、京都の庭園巡礼によって深化され、犀星文学の内実に連動することを論証した。

第二篇では、犬や金魚など様々な〈いきもの〉に焦点が絞られている。なかでも、飼犬に関する論では、飼主の「所有物」と、過去の記憶を共有した飼主の「分身」という飼犬の特徴を明らかにする。そして、初期小説の描写と象徴を比較することで、飼犬の特徴が、それぞれの主人公の心境に正反対な結果をもたらすことを指摘している。このほかにも、「愛猫抄」における幻想的な猫の描出や、「蜜のあはれ」における金魚の描写等についても論考が重ねられている。

第三篇では、犀星の実生活における「いのちの呼応」が扱われる。犀星の略歴や年譜とともに詩歌を並べることで、犀星の人生がその感受性によって彩られているとわかる。また、軽井沢の庭園（現・犀星記念館）の平面図や写真、情景描写は、犀星が自然と交感した〈庭〉の様子を実感するの役に立ち、犀星文学にある「いのちの呼応」をより鮮明に想像するための一助ともなった。

犀星作品は、二〇一三年にパブリックドメインとなり、犀星の描いた「いのちの呼応」が、作品を通して読者に感受される機会が増えた。そうしたなかで、犀星作品を「いのちの呼応」という観点から丁寧に読み解いた本書は、読者と作品との間の新たな「交感」を促す可能性を持っており、犀星文学の魅力を考えるうえでも重要な一冊であるといえよう。

（鼎書房 二〇二二年一月 二九二頁
本体価格二五〇〇円）

（やはら・るり 本学博士後期課程）